

# 吉野家より寄贈史料

二〇〇三年十二月十六日、吉野作造「長男故俊造氏宅より、吉野作造関係史料三十六点が記念館に寄贈されました。その後さらに額装された書、書籍など五十一点が寄贈され、合計八十七点にのぼる吉野関係史料が四月までに寄贈されました。

これらの史料は、吉野作造没後に女婿赤松克麿が研究室から持ち出したものの一部で、妻で吉野次女の赤松明子氏没後、吉野家で大切に保管されてきました。これまで公にされることになかった貴重な史料といえます。

記念館では、三月二十一日よりこれらの史料を「新収蔵史料展」にて展示しています。

そのなかで特に重要と考えられる史料を紹介しましょう。

吉野作造研究第一人者の松尾尊兌氏によれば、「とくに注目されるのは、一九一〇年代、辛亥革命後に中国より日本に亡命してきた革命派青年たちの色紙や手紙」です。

色紙十一点のなかには、今回初めて交流が明らかになった張群（蒋介石ブレインとして活躍）があります。

また額四点のうち特に重要品とされているのは革命派巨頭黄興らの寄書です。黄興最後の書蹟の一つとして貴重なものです。一九一六年五、六月頃の作とみられます。第三革命下の反袁世凱闘争勝利を祝う意味がこめられていると、中国近現代史研究

もり其の内御殿があったら是非共御出で下さい」とあります。菅原はその後長春で事業を失敗した際、吉野のもとを訪れています（吉野日記、一九二四年十月十九日）。

その他、天津の常磐ホテルに滞在していた吉野にあてた郷里古川の後輩千葉豊治の「祝御安着」のハガキなど、中国天津時代のハガキが四通あります。

また、吉野は一九一〇年〜一三年に欧米留学に旅立ちます。一九一二年秋から冬にかけてはパリに滞在、この時の吉野あてハガキが三通残されています。

吉野の大親友で憲法学者・佐々木惣一からのハガキ二通と、画家・小林万吾からの一通です。

小林万吾からのハガキには、「当日諸兄は午後六時頃より貴兄は四時頃よりお出かけ下さい」とあります。このハガキは一九二二年十二月二十八日付

でパリにいた吉野の下宿にあてて送られています。三日後の大晦日に日本人留学生六名が小林宅に集い、ウナギを食べること

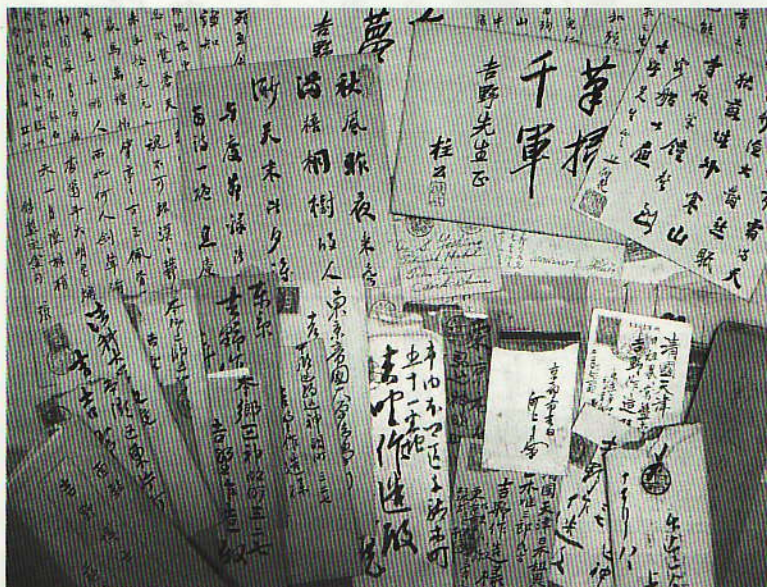
になっており、吉野はその手伝いに呼ばれたのです。吉野日記にも、「主人公の依頼により少々

早くより手伝に行きし也 六時客揃いて舌鼓を打って食べ十一時頃まで話して帰る」とあります（吉野日記一九二二年十二月三十一日）。

帰国後の書簡では、吉野のライバル・上杉慎吉からの書簡が目目されます。本文は事務的な内容のようですが、追伸に、「御著書拝受、毎度有難く存じ奉り候。御説服し難きもの多きは如何に堪えず。貴兄の賢明にしてかかる方向の考を抱かるるは誠に当代の一恨事に存じ候（句読点・田沢）」とあります。

著書とは、吉野帰国後の論文を集めた『現代の政治』で、そのなかには民衆運動を肯定し、普通選挙を唱えた論文が掲載されていました。天皇絶対主義を唱え、国家主義の立場を取っていた上杉にとって、吉野の議論は正反対の方向を向くものでした。日常生活では親交のあった上杉と吉野の思想的対立の片鱗をうかがわせる書簡です。

当館では、これらの史料を「新収蔵史料展」として四月十八日まで研修室で展示しています。（文責 田沢 晴子）



吉野家より寄贈された史料